

## ～平成家族物語～舞台芸術によるまちづくりプロジェクト第1弾

### 東松山戯曲賞優秀作『枇杷(びわ)の家』朗読劇制作発表会 登壇者コメント

日時：平成30年12月20日(木) 13:00～14:00

会場：東京芸術劇場 5階 シンフォニースペース



左から公益財団法人東松山文化まちづくり公社理事長 石田義明、『枇杷の家』作者緑川有氏、『枇杷の家』演出 瀬戸山美咲氏、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長 渡辺弘氏

**石田：**来年の4月30日で平成の時代が終わるということで、平成家族物語と称して舞台芸術によるまちづくりプロジェクト 第一弾「東松山戯曲賞」を今年の4月に創設しました。その平成の時代の大都市周辺の街、東松山もそうなんですが、そこで生活している方々、市民の方々の生き様を描いてほしい、生活のその拠り所としての家族の姿をあぶり出してほしいということで募集したところで、この度、全国から43作品の応募があり、1次選定で7作品を選ばせていただきました。「ひまわりは遠く」、「離陸」、「旋律は遠く、遠くに」、「埴生の宿」、「灰の降る夜に」、「枇杷の家」、「空で千の鈴が鳴る」、という7作品が選ばれたところで、先月11月3日、優秀作の選定を行いました。選考委員は岩松了さんを委員長に岩崎正裕さん、桑原裕子さん、瀬戸山美咲さん、そして渡辺弘さんの5人で選んでいただきました。この選考過程はすでに優秀作発表の際の選評でお伝えしたところです。(※添付資料 選評) 最終選定について瀬戸山さん、いかがだったでしょうか。

**瀬戸山：**最終選定では7作品が残り、色々な作品がありました。SF だったりとか、戦時中からの記憶についてのお芝居だったり、その中で『枇杷の家』は圧倒的にパワーがありました。『枇杷の家』の話はすごくシンプルな

お話で、ある3人の女性が一つの家にシェアハウスをしながら、そのうちの2人がある男性に恋をして、それでどうなるのかというお話なんですけれども、そのストーリーをみせる芝居というよりは3人がとにかくしゃべっている姿というのが書かれていて、それが印象的で、しゃべりそのものがとにかく面白い。ストーリーではなくその彼女たちがしゃべっていることに圧倒的にリアリティがあって、どうしても戯曲を書く、作者が言いたいことが台詞に出てきたりしてしまうんですけど、この作品は作者の思惑を超えて3人が勝手にしゃべっている感じがしました。選んでいるときには緑川さんのこと全然存じ上げないので、一体この作品はどんな人が書いているんだろうと、この登場人物のような人が書いているんだろうか？それとも全部想像してこういう人物を書いているんだろうか？実際に想像して、お会いしてみたら、そういう感じの方でした。本当にご自身の身体で書いてらっしゃるような生き生きした台詞で、その3人の女性の設定というのもとても面白く、50代と60代の女性が暮らしているのですが、それぞれ全然違って、例えば一人は恋愛もほとんどしないまま何にもないまま50代後半になった人もいれば、夫と死に別れた女性もいてという中で、昔の話も現在の話もごちゃ混ぜになって話をしている。40年前の恋の話で喧嘩もするし、今この瞬間のルームシェアのルールのことでも喧嘩をするっていう、なんか混沌としながらも、ただそういうものが重なりあって彼女たちが歩んできた道だったり、今現在どうなのかとか浮かびあがってくるんです。実は多分すごく構成もちゃんと考えてしっかり書かれていると思うんですけど、そういうことを感じさせない、特に岩松選定委員長がおっしゃっていたのは、「くっちゃべり芝居」だと、すぐ名付けていらっしゃって、その通り気持ちいいくらい「くっちゃべり芝居」です。ある種、平成の家族という今回のテーマとは一見すぐはつながらなかったんですけど、何か人とつながってコミュニケーションをとるっていうことだったりとか、家族といっても血のつながりではなく、気の合う人と暮らすっていうことだったりとか、その家族というテーマにもちゃんと関わっているんです。すごく力強い作品なので、今回3年間これを、リーディング、演劇、音楽劇としていくことに耐えうると思って選びました。

**石田：** 渡辺さんも一言。

**渡辺：** 選考委員4人、私も入れて5人なんですけど、特にこの4人の方たちが約3時間の激論をされました。正直どの方向に行くのかなというのはありましたが、今瀬戸山さんが言われましたけど、岩松さんのリードがあって、むしろ今の時代に合う、このしゃべりまくっているおばちゃん3人が、喋りの中に透けて過去というか平成の時代が見えてくるという構成だなというところに、皆さん段々気持ちが進んだように思います。他にも、UFOが東松山に降りてきてそれがとんでもないことを起こすとか、7作品それなりにレベルが高かった。皆さん、意表をついた設定をされていて、昭和だと戦争があったりだとか、そういう歴史があるんですけど、平成という時代は、意外と捉えどころがないところがあり、それを皆さんが面白い設定にされているところが、私としては印象に残りました。

それでもとにかくシェアハウスで喋りまくっている、女性たちのパワーっていうか、平成という時代はすごく女性が出てきた時代だと思っておりまして、このことがすごくよく表れていると思い、最後はみなさんこの作品にしましょうと。3時間くたくたになりながら確認したという最終選定会議でした。

**石田：** 私は、岩松さんから、「東松山戯曲賞を作り始めたときに、どういうものをイメージしたか」と聞かれて、「特にないんですよ」と言った記憶があります。「枇杷の家」が選ばれた後に、岩松さんから、「こういう作品を、この企画で、そして東松山で取り組んでいけばいいんだよ、東松山発信で」と、教えてもらえたんだ、応援をいただ

いたんだと気づいたのです。

そこで、この緑川有さんの「枇杷の家」が優秀作に選ばれました。

緑川さんのプロフィールに関しましては、お手元の資料をご覧ください。（※添付資料 登壇者プロフィール）

それでは受賞にあたってのコメントを一言お願い出来ますでしょうか？

**緑川：**今皆さんから、とても構成もよくて、平成の家族像を表しているという風にお褒めを頂いたんですが、書いているときには、全然そういう風に考えていませんでした。本当にただくっちゃべりという感じで書いていて、書いているのが楽しく、3人の女性が喧嘩したり、食べたり、飲んだりして日々を過ごしていることをただ書いているものだったので、そんな構成あったっけ？みたいな感じで。

本当にそういう風に仰っていただいて嬉しく思って、ちゃんと書きなさいと、育てていただいているなと思っています。

また、今現在、書きあがったものを瀬戸山さんのご意見を聞き直しながら勉強しております。

今回受賞できたことは、私がうまく書いたというよりもこの枇杷の家という場所に住む3人のアラ還女性のパワーが勝ち取ったものなんじゃないかと思っています。

どうぞ楽しみに待っていてください。

**石田：**①～④…緑川さんへの質問

**① どうして応募されたのか？**

**緑川：**応募については、戯曲の公募がないかインターネットで検索していました。

その時、平成家族物語？しかも舞台芸術でまちづくりプロジェクト！まず、ここに惹かれました。

そして、検索していくうちにさらに魅力的な事が！なんと最初に朗読劇、つぎに演劇、最後には音楽劇！こんな太っ腹な企画を考えてくれているのは初めてだと。もし、受賞出来たら公演してもらえるんだ！と。

そこが嬉しくて応募しました。

**② 枇杷の家というタイトルの理由は？**

**緑川：**まず、考えたのは1本の木の下に人が集うというところに、家族というものを考えました。それから、最初はハナミズキの家というのを考えましたが、実がなる木が良いなと考えなおしました。

そこで、自宅のそばにある枇杷の実がたくさんなるお宅を思い出して、枇杷の実っていいなと、そして枇杷の実っていうのは、一つの房に3つ4つと実がつくさまが、家族のようだ・・・と後付けですが、考えました。

**③ ご職業が、グラフィックデザイナーであり、小説家ですが、小説から戯曲へのステップについてどうお考えですか？**

**緑川：**小説家とプロフィールには書いておりますが、プロとして、作品を文芸誌で発表したり、出版出来ているわけではないので、小説家というのはちょっと恥ずかしいものがあります。戯曲を書いてみて、小説とは大きく違いました。小説は心理描写や風景描写なども書くことができますが、戯曲にはセリフ、それにト書きだけと制約があるのですが、そんな中で書いていてほんとうに楽しかったです。特にこの作品は、ただただしゃべり続けるという内容なので、筆が・・・というか、パソコンでパパパッと書いて、すごく早く書けました。この作品は3日くらいで書い

たんです。(会場、登壇者全員どよめき)

そのあと、もちろん、何度か推敲は重ねましたが、意外と私、戯曲に向いているかもと思って！ 小説も戯曲も、これからどんどん挑戦したいと思っています。

#### ④ 朗読劇から演劇を経て音楽劇に代わる事についてどう感じておりますか？

**緑川**：先程も申し上げましたが、本当に期待しております。瀬戸山さんの演出にも期待しておりますし、本当にどんなものになるんだろうと、朗読、劇演劇のさることながら、音楽劇ってどうなるんだろうと、本当にもう、3年間元気に生きていくちゃ！と思っています。

**石田**：市民参加を目指し、出演者の募集を行った。男性5名、女性18名の応募があった。年代も1951年生まれから1990年生まれまで。半数が、東松山市内からの応募、初めての挑戦となる方が多数いらっしゃる。また半数は、都内などで活動されている俳優の方。当財団の取り組みに大変興味を持っていただき、また、瀬戸山さんの演出という事に魅力を感じている方が多数。来年1月19日にオーディションを行います。また、2月から3月にかけて東松山市総合会館にて稽古を行う。

上演は平成31年3月24日(日)、松山市民活動センターホール。

どのような舞台にしたいか、そのため、オーディションに向けての考えを瀬戸山さん、いかがですか？

**瀬戸山**：今年はず、リーディングで上演ということですが、この戯曲は市民劇でやるにはセリフが多くて、ハードルが高い作品だと思います。そうゆう意味でも、リーディングから始められるのは本当に良かったと思っています、セリフを覚えたり、動いたりすることによる集中の分散がなく進めていける事は、参加者の方にとっては、いいのかなと。話す速度も速く、分量もすごく多くて演劇をやってきた方でも大変だと思いますが、とにかくみんなでチャレンジしたいと思っています。

また、応募者も多数と伺っております。実際にお会いしてみないと何とも言えませんが、リーディングですので特に年齢にはこだわらず選んで、とにかく一緒に話をしながらつくれる人を選びたいなと思っています。

私自身41歳なんですけれども、枇杷の家に登場する50代から70代の登場人物に、私自身達していない年齢で、おそらく分かっていない部分もたくさんあると思うので、その部分は出演者の方に教えて頂いたりしながら、また、緑川さんにもどンドン稽古に来ていただきながら、この戯曲には何が書かれているかをみんなで話し合いながらつくりたいと思います。

**石田**：この後3月24日には、公演となり、2回目の終演後には、トークセッションとして「平成の家族を語る会」を開催する予定もあります。本日登壇した3人に加え、週刊文春WOMAN編集長の井崎さん、そしてNPO法人フォーラム自治研究理事長の嶋津さんにも登壇願う予定。朗読劇で笑い、涙して、終演後くっちゃべり芝居を観てのくっちゃべり会で、来る時代の家族像を考えていただけたらと思っています。(※添付資料平成の家族を語る会) 来年度は、演劇、音楽劇として東松山市民文化センターで上演予定。

演出をお願いする瀬戸山さんには、初めての試みであり、大変な作業となると思う。現在新進気鋭の演出家として八面六臂の活躍をされている瀬戸山さんに素晴らしい舞台を作っていただけると、期待している。瀬戸山さ

んに、演劇、音楽劇の方向性をお話頂けますか？

**瀬戸山：**リーディングも始まっていないので、正直演劇、音楽劇とどうなるかというのはいわからない状況ですが、演劇に関しては、この作品はものすごく食べたり飲んだりする場面が多い戯曲で、リビングの一室での、3人の生活を描いています。実際にめいっぱい食べたり飲んだりしたいなと考えています。

音楽劇に関しては、作品自体に音楽の要素があり、曲のイメージをみたいなものも書いてくださっているのもあり、東松山で音楽をやったり、コーラスをされている方だったり、楽団の方と一緒に組んで作っていただけたらなと。東松山は大変コーラスが盛んで、沢山の団体があるとお聞きしておりますので、リーディングから入って頂けたらと思っています。2年目3年目については、私も緑川さんも東松山出身ではないので、これからどどん街の事を知っていくと思うのですが、参加者の方々と話しながら「東松山あるある」なんかも盛り込みながら、一緒に3年間育てていきたいと思っています。

**石田：**また、渡辺さんには舞台制作について、彩の国さいたま芸術劇場の全面的なご協力をお願いしている。県の文化施設と市町村の文化施設の新しい形の協力関係ができるのではないかと期待しているところです。渡辺さん、劇場との関わりと今後の展開についてお話しいただけますか。

**渡辺：**石田理事長が言われたとおり、県としての役割とは、という事も問われておまして、昨年からは吉川市とも関係性を築いて制作協力をしております。

私どもが持っているノウハウは広く県民の皆様にご利用していただければと考えております。

手を組んで広げていくことにより、埼玉県のアート文化振興につながっていくと考えております。

**石田：**最後になりますが、公募の際にも申しましたが、9万程の小さな市が行う、このような取り組みは、全国初となります。「小さな街の小さな公社の大きな取り組み」として頑張ってもらいたいと思っています。そして、大変ですが、岩松委員長の選評の最後をご覧ください。

「今回こうして東松山市が戯曲を募るという企画に私自身驚いたのだが、授賞作品を出せたこともさることながら、予想以上に面白い作品が集まったことが嬉しかった」とおっしゃって頂いております。

選考委員の岩崎さんも「東松山市という大都市でない場所に、新しい戯曲賞が創設されたことを喜びたい」と選評で述べられております。

このような小さな街のチャレンジングな、専門家もびっくりする取組に、報道機関、並びに演劇関係の皆さま方からの絶大なご支援をお願いします。